

平成22年12月14日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

今年、土浦市は市制70周年という節目を迎え、何とか往時の活気を取り戻そうと様々な方途の模索がなされました。かつて土浦は水陸交通の要地として賑わい、史跡や景勝地にも恵まれていました。しかし、今ではすっかり忘れられてしまった名所も少なくありません。本号では、こうした埋没してしまった土浦の景勝地の一つを、明治期の土中生徒の作文から紹介します。

## 常名の天神山

進修創刊号（明治33年1月刊）に「遊天神山記」と題した第二等級、田中久一氏の作文が掲載されている。その冒頭で、

「天神山ハ、我方郷ヲ去ル一里、常名村ニアリ。閑雅幽寂ノ地、頗ル眺望ニ富ム。」と常名村の天神山を紹介している。常名村とは、江戸期から明治22年までの村名で、

明治22年に、常名村は中貫・今泉・小崎の3か村と合併し、都和村の大字の一つになる。昭和23年、都和村は土浦市に合併され、常名は現在の板谷町・中都町・並木五丁目・西並木町・東並木町・常名町・若松町と称されている地域である。従って、この作文が書かれた明治30年代には行政上の常名村は無くなっていたのだが、日常的には旧村名が使われていたものと思われる。いづれにしても、天神山は今の西真鍋・殿里の西に隣接する常名町集落の背後にある丘陵である。

「今ココニ、明治戊戌八月、暑中休暇ニ際シ、初メテ登山ヲ果ス。此山甚高力ラスト雖トモ、巉巖峻峭、屹立スルコト數丈、岌乎トシテ墮チント欲ス。實二人ヲシテ、凜乎トシテ、毛髪ヲ堅タシム、即チ磴道ニ依テ、コレニ登ルニ、流汗淋漓漿ヲナシ、步履最モ惱ム。」

明治31年8月の夏休みに、初めてこの山に登ったとあり、この山はそれ程高くはないが、急峻であるため、登るのに大変難儀な思いをしたと記している。

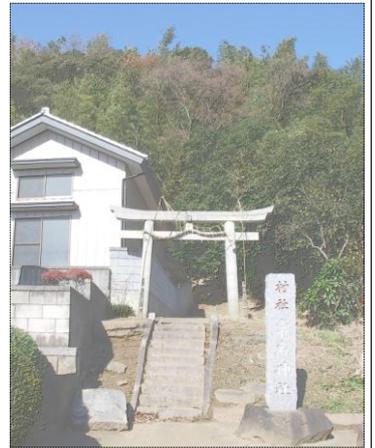
「磴ヲ拾フコト數百級、漸ニシテ山腹ニ至シリ。」

数百段の石段を登って漸く中腹という表現から、かなりの高山を想像してしまう。

「仰ゲバ千年ノ古松ハ、蒼鬱トシテ天ニ冲シ



山頂付近の石段と松の切株



天神山への登り口

在する霞ヶ浦、その畔を煙を吐いて走る常磐線、そして男体・女体二峰が聳える筑波山も一望のもとにあると、この地の眺望の素晴らしさを讃えている。

## 忘れられた景勝地

ここまで、この作文を読んできて、現在の天神山に行ってみたくなった。本校から僅か二〜三kmの地点、都和南小学校の近くの筈だ。このあたりは、南東に開けた桜川の沖積低地に臨む新治台地の末端部に位置している。

台地面は畑地が広がっているが、台地の急斜面・崖の部分は雑木の森になっている。崖下の湧水など水の得やすい地帯は集落の立地条件に好適で、坂田・常名・殿里・真鍋・木田余と台地崖下に列状に連なった集落を形成している。

俯セハ錦ヲ疊ムノ新緑ハ、瀟灑トシテ今將ニ滴ラントス。清風自ラ足下ヨリ起リ、思ハズ肅然トシテ歩ヲ進ム。山頂ニ祠アリ。蓋シ菅公ヲ祀ルモノナリ、殿宇甚タ宏大ナラスト雖、雨繪霜描、只整然タル古色ヲ存シ、却テ徒ニ丹青ヲ塗ル、近時ノ廟宇ニ勝ルヲ感ゼリ。跌座再拜、廟前ヲ辭シテ眺望ヲ恣ニス。萬頃茫然、沈碧激瀾、新鏡ヲ開クガ如キハ霞湖ナリ。帆船ハ點々風ヲ孕ンテ、白鷺ノ飛ブカト疑ハレ。汽車ハ轟々煙ヲ吐イテ、黒龍ノカケルニ似タリ、雄峻奇聳、浮黛蒼翠、馬耳ノ立ツガ如キハ波山ナリ。」

山上に聳え立つ巨木や鬱蒼と茂る森に感嘆し、山頂に鎮座する祠を、古色蒼然で趣のある社殿であると崇め、白帆の点

て標高は高が知れている。常名付近の台地標高は最も高い所でも30m弱である（新治台地の一部をなす真鍋台にある本校あたりの標高は約27m、である）。台地下の常名集落の海拔高度が2〜3mだから、その比高は20数%に過ぎない。だから何も夏休みに改めて登るほどの山ではない。ちょっとした暇があれば、散歩がてらに行ける所だ。

文章にあるように、確かに天神山への

道は険しい。礎が数百段とあるのは大げさだが、百段余りの急勾配の石段が頂上まで続いている。山頂近くにあったという数本の古松は枯れてしまい、今はその切株だけが残っている。切株の大きさをからみて、かなりの巨木であったことがわかる。ひととき高いこの松は、霞ヶ浦を航行する船の目印とされていたと地元の人には話す。かつての天神社は、八幡社や羽黒社など四社が合祀されて、今は常名神社と名を替えている。社殿も大正11年に再建され、本殿・拜殿ともに雨露を防ぐための上屋に覆われていて、その全貌を見ることはできない。なお、この社殿のある頂上一帯は、五世紀前半古墳時代の前方後円墳で「常名天神山古墳」として、土浦市指定の史跡になっている。

### 幻の滝

さて、この後に続く文章が問題だ。

「眺ムルコト数時、去ツテ崖下ノ清流ヲ吸ム。混々トシテ岩一激シ碎ケテ玉トナリ、散シテ霧トナリ、漸ク下ツテ一條ノ瀑布トナル。落下数丈、股洩トシテテラ振ハシ、飛沫奔馳ス。ソノ状、水ハ崖ヲ懸ンテ啣ムカ如ク、崖ハ水ヲ怒ツテ蹴ルガ如シ。(以下省略)」

名文で綴られているこの急流瀑布の記述をどう現在の常名・天神山に見出したらよいか。

清流下って、一條の瀑布となり、数丈を落下して、山を震わし、飛沫奔馳するところがあるが、この記述通りの情景を素直にとれば、例えば日本百名瀑の一つである「袋田の滝」ほどのものを想定してしまう。常名界限に、そんな大きな流れは全くない。小さな沢すら見当たらない。それは、今も昔も同じだ。

常名の天神山に急流の谷川が存在することは地形的条件から見ても無理である。急流瀑布を有するような谷川は、背後に広大な山地を有し、豊富な水源涵養地域がなければならぬ。天神山の斜面は前述したように乏水地域の代表ともいえる。洪水の後に台地上の雨水が一次的に斜面を流れることはあっても、常時流れ下る谷川など形成されることはない。台地崖下の地層からは、台地の地下水が湧き水となって流れ出すことはある。そこから台地の浸食谷である谷津田などへ流れ出す小川はあり得るが、このような流れを「水は崖を啣み、崖は水を蹴る」

奔流として記したとは到底思えない。

そうであるとすれば、この文章の件(くだり)をどう捉えればよいのであろうか。彼は天神山に、人があまり行かない奥深い自然、つまり「深山幽谷」を求めたのではなからうか。低いながらも一歩踏み入れば、生い茂る樹林や険しい山容に「深山」を感じ、仄暗い樹間に見える隠れる山肌の一角に「幽谷」を思い描いたのかも知れない。それは、天神山急崖が形作る空間構成が醸し出す情誼から、枯山水の庭園を観るような視点で捉えた渓谷であったともいえる。

そう読み解くことで、天神山は彼の想いと重なる「山水」の世界であり、郷土に、この山紫水明の地があるのだと誇らしげに述べていることが理解できる。

### 土浦の人気スポット・天神山

ここで参考までに、『進修』第3号(明治34年7月刊)に掲載された第四年級・月笠子なる生徒の「土浦附近の勝地を記し併せて我同窓諸子に望む」という一文に天神山を記した部分がある。

「土浦町を去る一里程、常名村にありて閑雅幽寂、頗る眺望に富むの一丘、之れを天神山と曰ふ、丘甚だ高からずと雖も、屹立すること数丈、九折の坂路に沿って登れば、古杉古松鬱蒼として陰をなし、晝なほ日の光を見ることあたはず、丘頂菅公をまつるの祠あり、殿宇廢朽と雖も皆古色を存し、人をして凜然神威のあるところををしらしむ、堂に憑つて眺望を恣にすれば、丘下一眸の外にいでず、碧波漾々として際なく、白帆出没するものは霞湖にして、遙かに西南の方にあたりて雲耶雲にあらすと疑はしむるのは富士の山なり、北は遠く林間をへだてて小田筑波の諸峯高

く雲表に聳ゆるを見る、真に一幅の活図畫なり、(以下省略)」

先の田中氏の文章によく似ている。例えば、「我力郷ヲ去ル一里、常名村ニアリ」と「土浦町を去る一里程、常名村にありて」、「閑雅幽寂ノ地、頗ル眺望ニ富ム」と「閑雅幽寂、頗る眺望に富むの一丘」、「此山甚高力ラズト雖トモ」と「丘甚だ高からずと雖も」など殆ど同一の用語が使われている。もしかしたら、月笠子は田中氏の雅号だったのではなからうか。そう考えて当時刊行された数刊の『進修』を丹念に調べてみた。創刊号にあの名文を発表した田中氏の作品は、その後刊行された『進修』のどれにも見当たらない。田中氏の同級生であった山口剛・中山庄一郎・菅谷軍次郎らは卒業するまで揃って『進修』各号に作品を発表し続けている。ただ、『進修』第2号(明治33年9月刊)巻末の「雑報」の中に、雑誌部委員としての田中久一の名前が山口剛や中山庄一郎らと共に記されていた。あくまでも推測に過ぎないが、田中氏は『進修』への執筆よりも、その編集に力を注いでいたのではなからうか。月笠子が田中氏の雅号であったかどうかはさて置き、『進修』各号には修学旅行の紀行文をはじめ、休暇を利用しての旅を綴った作文が数多く載せられている。筑波山・霞ヶ浦はもとより、真鍋の総宜園、高津の西施岡や愛宕山、常名の天神山などは、当時の土中生にとつて格好な逍遙の地だったのである。

なお、この作文を書いた田中久一氏をはじめ、文中にある山口剛・中山庄一郎・菅谷軍次郎各氏はいずれも本校が分校として創設された際、最初に入學した第一期生であったことを付記しておく。